

20 適塾に学んだ広島県北出身の

先人たち

江川 義雄

適塾姓名録によると広島県出身の入門者は三十一名で、それらの調査研究は芝哲夫氏らをはじめ多くの発表がみられる。

本発表では詳しく紹介されなかった広島県北部出身の適塾生であった庄原市の渡辺玄丹を中心として、玄丹に関係のある同郷者で、同じ適塾に学んだ今井雄策やそれと親族である水野玄鳳、更に神植元鳳（しんくゑのうゑ）、神植格之助兄弟の人物と彼等が郷土に与えた影響について考察したい。

渡辺玄丹（天保十四年・一八一三—大正五年・一九一六）は庄原市（当時・備後国三上郡庄原村）の第十二代医家である渡辺易安の子として出生した。幼名を虎次郎とよび、長ずるに及び禮三といい、医師となつて玄丹と称えた。

適々塾姓名録には吉備庄原・渡辺易安悱禮三とあり、文久二年（一八六三）正月と記録してある。備後と吉備の書きがちがみられ、地元では玄丹の名が好んで使われている。玄丹は十八歳で上阪し、適塾に入門した、洪庵が江戸に出仕するまで数カ月の塾生である。洪庵が江戸に去つた後の玄丹の行動は不詳である。自筆の履歴には種痘学を東京の吉田攝齋に学んだと記してある。万延元年三月より文久三年四月迄、適塾の山口寛齋や洪庵に蘭学を学んでいる。山口寛齋の娘・いくと後述の神植格之助が結婚することになる。適塾では福沢諭吉が七年先輩に当るが、諭吉が江戸に去つた後の適塾々頭は松本順であつて、口伝によれば、玄丹は松本順に従つて修業し、東京府泉橋種痘館において、明治三年六月、玄丹二十八歳の時に庄原に帰り、医業・薬業を営んだ。適塾や在京時代の修学体験を中国産地の僻地に結実させる可く、医学・育英・行政の各分野に画期的な事業を手がけている。その代表的なものは、玄丹が中心的役割を演じて他地方にみられなかつた庄原英語学校を明治十七年に設立させたことである。その教師の多くは慶応義塾より招いた。こ

のような慶応義塾分校は既に京都・大阪には実現していた。その他の育英事業は庄原実業学校その他、明治十年代より開設したことは特筆さる可きことである。これらの経緯は適塾と間接的にかかわったものと考えられる。

玄丹の先代には好学の人に恵まれ、祖父・貢郷、号は桃園で、京都の後藤門下に入り、巖垣・龍溪禅師について経学を学び、帰郷しては、神辺の菅茶山に師事している。渡辺邸は、茶山により碧梧亭と命名される程の親交があり、そこには漢詩、俳諧の友として高名な医師であった赤沢章達や多賀庵三世と称せられた医師・玄蛙などがある。

玄丹の子孫に、適塾入門者の今井雄策とその親族である水野玄鳳がいる。この水野玄鳳は十五歳で神辺の廉塾に入り、頼山陽と共に上洛して、究理堂に学び、更に長崎で吉雄権之助につき、シーボルト来日によって更に五年間修業したといわれる。その子の水野宗民は適塾に入門し、山口寛斉にも学んだといわれるが、その姓名録に署名はないが、呉秀三がその墓表を撰している。

神植元鳳と神植格之助は山口寛斉をたより入塾してい

る。神植兄弟についての業績の一部は既に発表したところである。

このように広島府下から遠く離れた地域にあつて適塾に学んだ渡辺玄丹・今井雄策・神植元鳳・格之助たち先人をあらためて紹介し、彼等の相互関係や郷土文化に貢献した業績を報告する。

(広島県廿日市市)